

# 自律性の確保を契機としたソーシャルワーク課題の 再形成と実践観形成プロセスの検討

—独立型社会福祉士の実践から—

Re-formation of a social work subject and examination of a practice view formation process ignited  
by reservation of autonomy

— From an independent type social worker's practice —

小 川 幸 裕  
yukihiro OGAWA

## I. はじめに

近年、既存の組織から独立し地域で実践を展開する独立型社会福祉士の活動が広がりを見せている。独立型社会福祉士とは、「地域を基盤として独立した立場でソーシャルワークを実践するものである」とされ、さらに「ソーシャルワークを実践するにあたって、①職業倫理と十分な研修と経験を通して培われた高い専門性にもとづき、②あらかじめ利用者と締結した契約に従って提供する相談援助の内容及び、その質に対し責任を負い、③相談援助の対価として直接的もしくは第三者からの報酬を受ける、という方法で仕事をしている社会福祉士」と位置づけられている（日本社会福祉士会 2006）。このような活動は、これまで既存の組織に所属する社会福祉士では対応が困難な課題に対して有効な活動ができる実践形態として期待がよせられている。

これまで独立型社会福祉士に関する調査および研究は、日本社会福祉士会による報告書（2004）をはじめ、水嶋（2007）や小川（2007；2008a）によって研究が行われてきたが全体的な動向や具体的な有効性を示すには至っていない。その後、高良（2010a；2010 b）によって、独立型社会福祉士の全国的な実態把握が行われるとともに、高い自律性によって福祉政策にもとづく制度から排除された人々への支援を可能としていることが示された。時井（2005）も、専門職のもつ自律性こそが専門職の根本的特質的要素であると述べており、独立型社会福祉士の実践の有効性を示すうえで自律性は大きな要因であるといえる。

しかし、自律性の確保が対応困難な課題をどの

ように捉え対応可能な課題に位置づけていくのか、そのプロセスに着目した実証的研究はほとんどみられない。

以上から、自律性の確保を契機に地域を基盤として活動する社会福祉士として対応すべき課題が再形成され、課題に対応する新たな実践感が形成されているのではないかと考えた。そこで、本論では独立型社会福祉士への調査で得られたインタビューデータから、自律性の確保による課題の再形成を経た独立型社会福祉士の実践観の形成プロセスについて検討する。

## II. 用語の定義と研究方法

### 1. 自律性、実践観の定義

本論では自律性を、香春（1994）や辻ほか（2004）などの文献を基に「専門職としての価値観、判断に基づいて選択決定し、その行為に対し自らの責任で行動できること」と定義する。また、実践観については平塚（2011）の文献を参考に、「ソーシャルワークの理論知と経験知がソーシャルワーカーとしての実践や生活体験を通して形成される援助観（価値—倫理観含む）の総体」と定義する。

### 2. 調査協力者

調査協力者は、独立型社会福祉士として実践を展開している社会福祉士と、インタビューを終えた調査協力者に調査の目的に沿う独立型社会福祉士を紹介してもらった。紹介された独立型社会福祉士のうち調査に同意が得られた独立型社会福祉士28人を対象とした（表1）。

### 3. 調査方法

調査は調査対象者の実践地域を訪問し事務所またはプライバシーが確保できる喫茶店などで行った。インタビューは、半構造化インタビューを用いた。インタビューの内容は、「独立するプロセスにおけるジレンマ経験について」「現在の実践内容と課題について」「独立型社会福祉士として実践する上で意識していること」「今後の展望」などを中心にインタビューした。不明確な点は確認したが、話の流れを重視するよう意識して行っ

た。インタビューはそれぞれ、1回1時間半から2時間実施し、2007年8月から2011年2月の期間に実施した。すべてのインタビューはICレコーダーで録音した。

### 4. データの分析方法

データは修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)を用いて分析を行った。M-GTAは、データの切片化を行わず文脈依存的なプロセスを明らかにする上で適応性が高い。ま

表1 インタビュー協力者の属性

No.	年齢	性別	社会福祉士以外の主な資格	事業形態	主な活動
1	50代	男性	介護支援専門員	個人・NPO法人	後見・居宅
2	30代	男性	—	個人・共同	後見・コンサル
3	40代	男性	介護支援専門員	有限会社	居宅・後見・講師
4	40代	女性	介護支援専門員・看護師	個人事務所	後見・講師
5	40代	男性	介護支援専門員	個人・共同	後見・講師
6	40代	女性	介護支援専門員	個人・共同	後見・居宅
7	30代	男性	—	個人	SSW・後見
8	30代	男性	—	有限会社	居宅
9	40代	男性	—	有限会社	居宅
10	60代	男性	行政書士・介護支援専門員	個人	後見・地域貢献
11	50代	男性	—	個人	後見
12	40代	男性	介護支援専門員	有限会社	居宅・後見
13	40代	女性	介護支援専門員	個人	後見・居宅
14	50代	男性	—	個人	後見・講師
15	30代	男性	介護支援専門員	個人	後見・講師
16	40代	女性	—	個人	後見・講師
17	40代	男性	精神保健福祉士	個人	後見・講師
18	50代	女性	介護支援専門員	個人	後見・講師
19	40代	男性	福祉住環境コーディネーター	個人	後見・第三者評価
20	40代	女性	介護支援専門員	個人・NPO法人	後見・居宅
21	60代	男性	—	個人	後見
22	40代	男性	介護福祉士・2級建築士	個人	後見・不動産
23	40代	男性	介護福祉士・福祉住環境	個人・NPO法人	後見・居宅
24	40代	男性	介護支援専門員	個人・NPO法人	居宅・後見
25	60代	男性	介護支援専門員	個人	後見・講師
26	50代	男性	介護支援専門員・介護福祉士	個人	後見・講師
27	40代	女性	介護支援専門員・介護福祉士	個人	居宅・後見
28	50代	男性	—	個人・共同	後見

—：その他の資格なし

個人：個人事務所

共同：共同事務所

後見：成年後見・任意後見の受任

居宅：居宅介護支援

コンサル：コンサルテーション

SSW：スクールソーシャルワーカー

た、分析を行った調査対象者の職域がヒューマンサービス領域であることや組織との相互関係性の視点を重視すること、結果は概念とカテゴリー（複数の概念のまとまり）の統合された関係として全体の相関図を示すため、独立型社会福祉士における課題の再形成および実践観の形成過程を明らかにする本研究の目的に有効と考え、M-GTAを分析方法として採用した（木下 2007）。

録音をしたデータはすべて逐語録に起こし、それを基に時系列に沿って活動や意識の変化を整理した。また、作業効率を高めるため質的データ分析ソフト Maxqda2010を使用した。分析は1行ずつ読みまとまりごとにコード化を行い共通する概念名を生成した。そして、概念名、定義、コードとデータの一部、解釈を記載し、概念生成と解釈を繰り返し分析ワークシートとしてまとめた。その後、概念のまとまりをカテゴリーおよびサブカテゴリーとして形成し、概念やカテゴリーの関連性を全体関連図に書きだした。

### Ⅲ. 倫理的配慮と研究の質的担保

本研究では、インタビューを依頼する際には調査の目的を伝えとともに、可能な限り事前にインタビューの依頼文書をはじめ質問項目やこれまでの調査結果などを送付し調査内容について確認をとった。また、インタビューの際には、再度研究の目的および話せる範囲で構わないこと、プライバシーの厳守について伝え、データの扱い（録音・逐語記録・分析手順と方法・結果の公開・論文化）については文書および口頭で説明し、了解が得られた場合に承諾書に署名してもらいインタビューを開始した。

研究の質の担保のために、分析作業は調査者である筆者に加え M-GTA 法を理解している第三者との検討を行った。また、分析結果を文章化したものを調査対象となった調査協力者に報告し、実践経験に照らして信頼性があるか、不明な点がないか意見聴取を行った。

## Ⅳ. ストーリーラインの抽出および結果

### 1. ストーリーライン

28人のデータ分析の結果、【ソーシャルワーク課題の再形成】【実践観の形成】の2つのカテゴリーに分類した。また、本研究における独立型社会福祉士における実践観の形成過程の全体関連図は図1に示した。また、ストーリーラインは以下のとおりである。

既存組織でのジレンマ対応としての独立を経て獲得した《自律性の確保》によって、《狭間課題への気づき》が促された結果、【ソーシャルワーク課題の再形成】が図られていた。そして狭間課題への対応に向けて《ささえる》《まもる》《みせる》《つなぐ》《つくる》《ゆらぐ》といった独立型社会福祉士の【実践観の形成】に至っていた。

以下、独立型社会福祉士の実践観の形成過程におけるストーリーラインの詳細をカテゴリーごとに説明する。なお、【 】はカテゴリー、《 》はサブカテゴリー、〈 〉は概念とした。

### 2. 【ソーシャルワーク課題の再形成】：《自律性の確保》《狭間課題への気づき》

【ソーシャルワーク課題の再形成】とは、独立することによる《自律性の確保》によって、各種の《狭間課題への気づき》が促され、狭間課題が独立型社会福祉士の対応可能な課題として位置づけられることである（表2）。サブカテゴリーとして、《自律性の確保》《狭間課題への気づき》の2つにまとめられた。

#### 1) 《自律性の確保》：〈立ち位置の明確化〉〈地域に入る〉〈即応的対応〉

《自律性の確保》は、独立することで既存組織でのジレンマ体験から解放され、専門職としての機能を自らの裁量で発揮できる環境に身をおくことである。概念として、他の利害に影響をされことなく利用者の利益を追求するといった〈立ち位置の明確化〉、地域に入り地域特性を理解するとともにニーズに応じて柔軟に対応する〈地域に入る〉、活動を制限されることなくニーズや利用者の利益に応じる〈即応的対応〉がみられた。

## 2) 《狭間課題への気づき》：〈制度の狭間〉〈支援者の狭間〉〈地域の狭間〉

《狭間課題への気づき》とは、組織に所属することで制限されていたソーシャルワーク実践が自律性の確保によって可能となり、これまで対応が困難な課題として位置づけられていた制度・支援者・地域などの狭間に存在する課題に気づき社会福祉士として対応が可能な課題として再認識することである。概念として、現状では対応が難しい制度やサービスの狭間に気づく〈制度の狭間〉、支援者の価値観や支援の範囲が異なることで発生している狭間に気づく〈支援者の狭間〉、住民意識や土地の特性によって発生している狭間に気づく〈地域の狭間〉がみられた。

## 3. 【実践観の形成】：《ささえる》《まもる》《みせる》《つなぐ》《つくる》《ゆらぐ》

【実践観の形成】とは、《自律性の確保》によってソーシャルワーク課題として位置づけられた各種の狭間に存在する課題を独立型社会福祉士として対応すべき課題として位置づけ、これらの課題に対応するために独立型社会福祉士の実践観を形成することである（表3）。サブカテゴリーと

して、《ささえる》《まもる》《みせる》《つなぐ》《つくる》《ゆらぐ》の6つにまとめられた。

### 1) 《ささえる》：〈生活のつながり意識〉〈土着感覚〉〈基盤としての地域〉

《ささえる》とは、意識化された各種隙間に対応するために切れ目のない支援を行うことである。概念として同じ地域で生きる一人の生活者であることを意識化する〈生活者としてのつながり意識〉、利用者と同一土地で生活を続け土地への愛着をもつ〈土着感覚〉、利用者個人にサービスを提供するだけでなく地域で支えることにこだわる〈基盤としての地域〉がみられた。

### 2) 《まもる》：〈権利意識の醸成〉〈語りの尊重〉〈権利意識の伝達〉

《まもる》とは、独立した立場で支援できる環境に身を置くことで、どの組織の利益にも左右されず利用者の利益や権利を擁護することである。概念として、権利意識を高めなければならない環境に身をおくことで図られる〈権利意識の醸成〉、利用者の語りを支援の原点とし自らの意思で時間を配分できることで可能となった〈語りの尊重〉、利用者の権利擁護を実際に行うだけでなく、社会福祉士として権利擁護の価値や必要性に

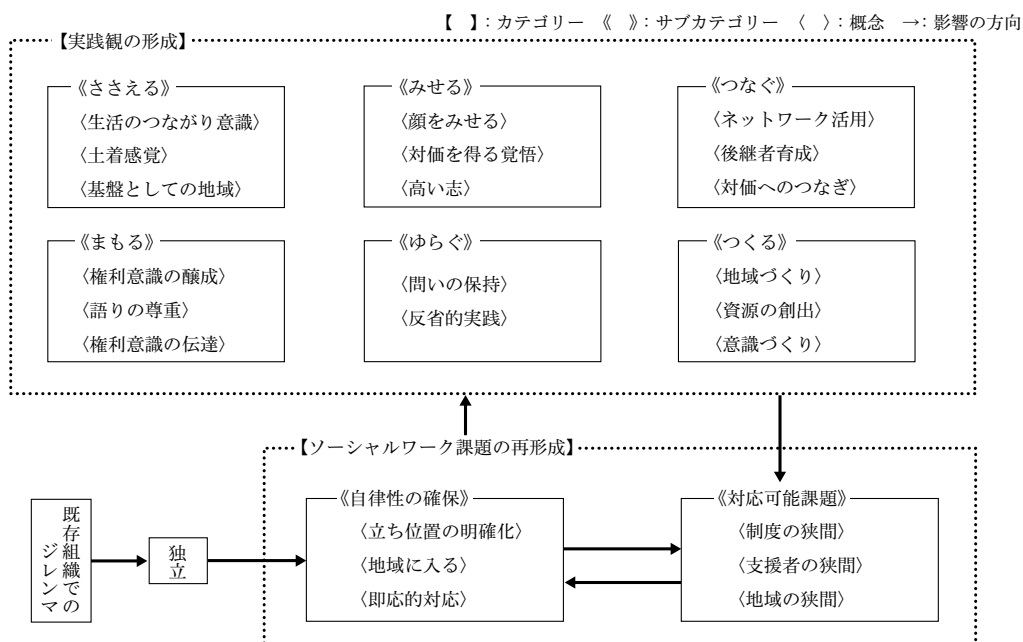


図1 独立型社会福祉士の実践観の形成プロセス

表2 ソーシャルワーク課題の再形成

サブカテゴリー	概念	定義	データの一部
自律性の確保	立ち位置の明確化	利用者の利益を追求するという立ち位置を明確化する	「利用者さんがこう言ってますから何とかしましょうって言っても施設の壁に阻まれてしまったりということはありますけど、今度は利用者側ですから望んでいるんだから何で出来ないのっていう進め方はできるようになった」 「その人らしい生活、それにお手伝いできる、それはやっぱり自分が制約されない、自分の軸を作ったうえで、事業としてかかわるのか、その違いはある」 「他の利害によって左右されない。……誰にも遠慮せずに言ったり動いたりできる」
	即応的対応	所属組織によって制限されていた活動ができる	「こう組織の中にあっては当然考えもおぼつかないし、出来ないようなことをやっていくっていう、やっぱりそういうのが大事な」 「自分の中の組織の中における枠が取れたんで、それで逆に今までやりたかったことをやってみようかということでそこから始めて」 「即応性、実効性を発揮できるところにいる人のほうが、本人にとっていいと思うし、援助する側も、いいんじゃないかなと」 「自由がきくっていうところで動めている社会福祉士よりは動きは幅が広く出来ます」
	地域に根ざす	地域に入り地域特性を理解するとともにニーズに応じて柔軟に対応する	「一番本当に地域に密着する根ざしたところで寄れるような、そういう必要性もあっていいんじゃないかと、だって社会福祉士だしソーシャルワーカーだし」 「これまではある一部の相談業務だったんです……それを地域でやりたい」 「ここ商業地なんですね。利用者も商売やっている人も多いんですよ。それに対応して日曜も（事業所を）開けました」 「この地域の中のこの人のまわりは、こういうことがあったんだっていう歴史散策というか、地域を再度見直すというか、全く知らない地域でも、入っているというか、それってやっぱり、他の人というか機関では味わえない」
狭間課題への気づき	制度の狭間	現状では対応が難しい制度やサービスの狭間への気づき	「行政を主として補完された支援しか来ていない、束にした支援っていう体制が無かった。……サービスがあるいは制度が切れてしまつてつながりが無い」 「制度のサービスのことは、とつてもきっちりやってくれるけど、ちょっと外れたらね、もう絶対無関心」 「どうしても制度が大きいから、隙間ができるし、隙間はだれも拾えないから、俺たちがいるのも、ある意味、自然発生的なところもある」 「生活を見れない部分があって、いろんな制度の、そこで、こぼれている」 「絶対、制度の中でカバーできるわけがないと、もれていきますよね、実際にね」
	支援者の狭間	支援者の価値観や支援の範囲が異なることで発生している狭間への気づき	「生活全般にアンテナが張られてない感じがしますね、法律系の人たちは。……弁護士さんや司法書士さんみたいに、頼まれたことに応えることで料金もらっているとやっぱり、（幅広い）ニーズに対応する義務はないんですよね」 「ボランティアの方だとこういうおっちゃんだったら路上の方が幸せだよとか、……ベテランでずっと長年やっているボランティアさんでもそうなんです」 「代弁の範囲というか、そんなところは見てはいないですから、裁判所とか、そこまでを見るということまでは出来てない」 「行政に任せても難しい、保守的なんです。で、誰かがついていっても皆やらない時期だったので、自分がなんとかせにゃいかんだろうと思って」
	地域の狭間	住民意識や土地の特性によって発生している狭間への気づき	「福祉アクセシビリティの必要性……、相談機関ありますよって行政は言います。……行けない現実が沢山ある」 「地域の中でだれがやってきたのって、いないわねって。……誰もいないって」 「寝たきりの人が、聴いたことがないと。初めて手続きしたと。障害年金もよくわかんない。役場にいったけど、何言ってたか分からないって。」 「関心が低いというのものもあるし、これも地域性だと思うんですが、役場にものをいうのが敷居が高い」

……：中略

( )：筆者補足

個人が特定される情報についてはデータを削除または加工している。

表3 実践観の再形成

サブカテゴリー	概念	定義	データの一部
ささえる	生活のつながり意識	利用者とのつながりを認識し自らの一人の生活者であることを自覚する	「子どもを持ったお母さんの気持ちっていうのは分かっていたつもりだけで分かっていたなかったから。母親っていう目線は同じになったかなって」 「ばあちゃんは入所してるし、入院しろとか言われてるし、軽費ではもう診きれない現状で、……特養にどうやったら入ったらいいのかわからない」
	土着感覚	利用者と同じ土地で生活し続け土地への愛着をもつ	「ここの町で生まれて、ここの町で育って、この町でずっと暮らして生きてるわけで、そこで何が必要かこの町に何が足りないのかを考え続ける」 「私はこの人だから。ここの地域のここの学校を使いたい。他の地域の人が私を知っているわけではない、ここの人たちは私がちっちゃいころから知っている人たちが暮らしているわけだから。……社会福祉士として広い知識を情報提供して、それが私がここで仕事をしている役割なんだろうと」
	基盤としての地域	サービスを提供するだけでなく生活基盤である地域で支える	「その人の終焉を一緒に歩いていくかっていうことだと思うから、どういうふうにこの人生生きていきたいかっていうか、どういうふうに住みたいかっていうか」 「僕らはその方のケアじゃなくてケアというか、生活支援だと思っていましたので、やっぱり地域に馴染める生活支援をしよう」と 「その人のホームグラウンドで勝負をどれくらい出来るか、……スタート地点はその人の住まいですからね、そこから私たち関わらせてもらう」
まもる	権利意識の醸成	独立をすることで権利意識を高めなければならない環境に身をおく	「独立型の社会福祉士っていうのは、単品でたってどこにも所属してないし何に向かって権利擁護しなければいけないかを、まじめに考えやすい環境にある」 「権利をちゃんと主張できるような役割があればいいかなと思う。だから、そういう意味では今後、独立型っていうのが、僕には新しい事業の形態なのかな」 「権利とは何か、権利侵害を直接的に及ぼしているのはだれか、誰に対してアドボケートしなきゃいけないかみたいものをしっかり自分の中でもつ必要があって、それがしっかりイメージできなければ駄目」
	語りの尊重	利用者の語りを聞く時間を確保し支援に反映できる	「一緒に寄り添ってきたからこそ、そこから出てくる抽出される言葉っていくつもあるので、その声を代弁っていう形で発していく」 「当事者との話でしょう。これは大事。……いろいろ出てくる。やっぱり一対一でしゃべるっていうのが必要やし、全体の中でその人を見ることも必要やし」 「時間をかけてしっかりその人の思いを聞くことができる……それをじっくり聞く時間を取ることができるのが独立。雇われていたらできない」
	権利意識の伝達	権利擁護の実践だけでなく地域や他専門職への伝達もその使命として捉える	「自分が被後見人や利用者さんとの関係の中で示す権利擁護の部分と、その権利擁護を考え方とかを、他の職種の人たちとか他の人たちに伝えたり、若い世代に伝えるという仕事も私の中ではものすごく大きな位置を占めている」 「権利擁護の視点、僕自身、権利擁護っていうのは、なんなのかは、分かっているけど、その視点は、みんなに伝えていくっていうのは自分の務め」
みせる	顔をみせる	地域を基盤として活動する社会福祉士という専門職の姿を明らかにする	「組織の中のイメージでのどこの会社の誰ということ。やっぱりまあ屋号はありますけど、その個人をみてもう」 「いかに自分達のやっている活動、事業が必要なのかっていうことを常にアピールすることを中心にはやってきました」 「地域社会の中で権利を守っていくために地域の中で社会福祉士が利用されたり活用されたり、もうこの分野は社会福祉士がポンと浮いてくる……やっぱり地域に根ざした社会福祉士像」

対価を得る覚悟	自らの実践に対して専門職として対価を発生させ、対価に耐えうる活動を行う覚悟をもつ	<p>「お金の話をすると誠意がないと、福祉はタダか廉価でやるべきだろうってね。そうでなくてこっちも仕事でやっていますから、これだけ貰うけどもいいって説明をする」</p> <p>「お金を貰う勇気ですよ。こんな今まで地域ボランティアとかやってたけど、ボランティアとレベルが違うんだからそこでお金貰ったらいいい」</p> <p>「独立型というんだったら、当然、有償です。報酬です、をもらわないといけ</p>
高い志	直接的なサービス提供だけでなくソーシャルアクションや社会貢献を意識した活動を行う	<p>「今後やっぱり注目していけないといけなのは社会に対してどうするか」</p> <p>「この町で生まれて、この町で育って、この町ですうっと暮らして生きてるわけで、そこで何が必要か、この町に何が足りないのか……、常に考える機会と、考え続ける、続けなきゃいけないものが、自分の中にある」</p> <p>「おかしいことを、おかしいという。変えていく……それは、ソーシャルアクションの姿っていうことです」</p> <p>「地元でかっこいい言い方をすれば地域貢献を、恩返しをしたい」</p>
つなぐ	ネットワーク活用	<p>「サービス提供者ではないからね。だから、自分の売りはそういうところ（ネットワーク）ではないかなと……だから、サービスの提供業者の人とも組みながらバックしていく」</p> <p>「自分で動かない。動かないけど受ける。受けてつなぐって徹底的にこの作業」</p> <p>「守ってくれるものがないですから。それ（ネットワーク）が生命線というか、それ（ネットワーク）に乗っかってない限りは生きてはいけない」</p> <p>「僕はそれ（ネットワーク）しかないですから。それがなくては生きてはいけない」</p>
後継者育成	独立を目指す社会福祉士のモデルとなることを意識する	<p>「後世に伝えるっていう役割がね、やろうとする人たちを育成するっていうのもひとつの役割、社会的使命」</p> <p>「最初はどっかで居候しててもね、独立型の居候して勉強して、何か描けるものであってほしいですね、何年後かに。もう、若いうちから描けるものであってほしい」</p> <p>「モデルを見せることで少しは変わってきているんですよね。学生ももう社会福祉士になってホームレス支援をしたいんだっていう人まで現れるようになって」</p> <p>「自分もそういうこと（独立型社会福祉士として活動）をしたいというふうに思ってもらえる人たちも出てくるのかなって」</p>
対価へのつなぎ	対価が得にくい活動に対価が発生する仕組みをつくる	<p>「例えば、遠方にいる息子娘と契約して町内にいる自分の家族や親の安否を月一回知らせるとかね、……ということに年契約でお金をだすとか。システムをつくればいい」</p> <p>「その元気なうちから将来の有事に備えていく。で、一生関わるその仕組みをもっと柱に商品にしたいと思っている」</p> <p>「人を支援してもお金が付いたりだとか報酬がちゃんと払えるようなシステムを今後も整えていく必要がある」</p> <p>「社会福祉士はね、ないところはサービスをつくらないといけないうっていう、そういうのでお金をもらわないといけないうから」</p>
つくる	地域づくり	<p>「人が集まるような形というか、そういうシステムを作ったり」</p> <p>「なんらかの必然性を作っておく。その必然性の中で気づいてもらえるような。その気づくっていうのは外発的動機付けと内発的動機付けがちょうどマッチングするようなかたちにしておかないといけないう」</p> <p>「帰ってきて親にこんなことしたら、あそこのばあちゃんにしかられたとかね、そういう会話、これが、力だと思ふんです。そういう地域の福祉にね、それがいま、希薄になっている。そういうシステムをつくっていかないといけないう」</p>

資源の創出	地域にサービスや社会資源が不足または欠如している場合は自らが作り出すことを使命とする	「誰するのって言うて、誰もいない。社会福祉士はね、ないところはサービス作っていかないといけない」 「地域の中で、必要なものなら、で、自分で出来ることだったら、自分でやる。しかも、相談援助っていうのが核で、いうものだから、自分のやりたいこととも合うし、自分でやろうと」 「社会資源がなかったら、それを開発したり、要望したりってのが含まれる」
	意識づくり 住民や関係機関に社会福祉士としての活動に対価を支払う意識を浸透させる	「相談をした場合にタダで相談に乗ってもらえることだけではなくて、自分が相談して援助してもらった場合にはお金がかかるんだってことを認識をし始めてきている」 「お金の話をすると誠意がないと、福祉はタダか廉価でやるべきだろうってね。そうでなくてこっちも仕事でやっていますから、これだけ貰うけどもいいって説明をする」 「地域が理解してくれて……後が大事なんですよれそこをある程度値上げしていかないと、僕の生活がいつまでも貧しいままなので、それは続かない」 「これだけの金額をもらうけどもいいかっていう話を事前にして、口頭だけだと勘違いも出てくるから必ず書面にして納得をしてもらって対応する」
ゆらぐ	問いの保持	高い自律性が独善的な実践に偏らないよう常に問いを保持した実践を意識する 「自分のペースで仕事をしてしまうというか、僕らでもそうはいいいながらも、やっぱり、自分のペースで相手を巻き込んでしまったり」 「客観性を生み出そうとする意識付けですかね。だから、いわゆるそれを内省力と私は言ってます」 「いわゆる、悩める力を持ち続けたいといけない」 「ずっと今でもあれで良かったのかなっていう想いは引きずっています」
	反省的実践	常に自らの活動の振り返りや他者からの評価を受けること 「サービスの依存、専門職の依存をさせてしまっている。……いつの間にか自分の自己満足、マスターベーションになってしまう、そこに自己覚知できないといけない」 「自己覚知が大事、自分自身を磨くってことが大事だし、自分自身をつきつめていく作業もどこか必要」 「自己評価っていうのは自分の都合のいいように評価ができる……その偏りを修正するために一番単純な方法っていうのは他の人の意見にきちんと耳を傾ける」 「今何（制度・サービス）を使っているかって自己覚知できない人はソーシャルワーカーになれないんじゃないか」

……：中略

( )：筆者補足

個人が特定される情報についてはデータを削除または加工している。

ついて同業種および異業種に伝えていく〈権利意識の伝達〉がみられた。

### 3) 《みせる》：〈顔をみせる〉〈対価を得る覚悟〉〈高い志〉

《みせる》とは、地域で活動する専門職としての社会福祉士の姿を利用者だけでなく同業種および異業種に見せることである。概念として、地域を基盤として活動する社会福祉士という専門職の姿を明らかにする〈顔をみせる〉、自らの実践に対して専門職として対価を発生させ、対価に耐え

る活動を行う覚悟をもつ〈対価を得る覚悟〉、直接的なサービス提供だけでなくソーシャルアクションや社会貢献を意識した活動を行う〈高い志〉がみられた。

### 4) 《つなぐ》：〈ネットワーク活用〉〈後継者育成〉〈対価へのつなぎ〉

《つなぐ》とは、独立型社会福祉士におけるネットワークを単に支援ツールとしての位置づけだけでなくリスクマネジメントや後に続く後継者へのつなぎ、対価の獲得など多様に活用すること



である。概念として、利用者と資源・専門職をつなぐだけでなく自らのリスクマネジメントとしてもネットワークを活用する〈ネットワーク活用〉、独立を目指す社会福祉士のモデルとなることを意識する〈後継者育成〉、対価が発生する仕組みをつくり対価が得にくい活動を対価につなげる〈対価へのつなぎ〉がみられた。

#### 5) 《つくる》〈地域づくり〉〈資源の創出〉〈意識づくり〉

《つくる》とは、利用者個人への支援だけでなく実践基盤とする地域の住民意識や土地の特性による地域特有の課題を捉え地域そのものへの働きかけも独立型社会福祉士の役割であると認識することである。概念として、利用者の利益を高める活動の延長線に地域づくりを視野にいれる〈地域づくり〉、地域サービスや社会資源が不足・欠如している場合は自ら資源を作り出すことを使命とする〈資源の創出〉、住民や関係機関に社会福祉士としての活動に対価を払う意識を浸透させる〈意識づくり〉がみられた。

#### 6) 《ゆらぐ》〈問いの保持〉〈反省的实践〉

《ゆらぐ》とは、自らの支援の是非について安易に答えをだすのではなく、問いを問いのまま保持し専門職としてゆらぐことに肯定的な価値付けをすることである。概念として、高い自律性が独善的な実践に偏らないよう常に問いの保持を意識した活動を行う〈問いの保持〉、自らの活動の振り返りや他者からの評価を受ける〈反省的实践〉がみられた。

## V. まとめ

以上、社会福祉士が独立することで獲得する自律性は、既存組織でのジレンマ経験への対応だけでなく、社会福祉士としての立ち位置を明らかにし、地域ニーズに応じた柔軟かつ即応的な対応を可能としていた。そして、地域を基盤とした活動を通して、制度・専門職・地域に存在する狭間課題への気づきが促されていた。さらに、狭間課題への気づきは自律性が確保された環境によって、対応可能な課題として位置づけられていた。

狭間課題が対応可能な課題に位置づけられた背景には、自律性の確保によって①語りの尊重（時

間を制限されることなく利用者の語りを尊重できる）②つながり意識をもつ（専門職として利用者に関わることを本質的態度とするのではなく自らも一人の生活者である自覚を接点として利用者とのつながりを認識し利用者の立場からも課題を捉えられる）、③地域課題の共有（利用者と同じ地域に事務所を構えることで地域課題を共有する）、④権利意識の醸成（個人として活動する環境となり権利意識が醸成される）、などが保障されたことが背景にあると考えられる。

また、狭間課題を社会福祉士（ソーシャルワーカー）として対応すべき課題として再認識した結果、独立型社会福祉士の実践観として①ささえる（支援の焦点を生活からずらすことなく地域での生活を包括的に支援すること）、②まもる（権利意識を醸成し利用者の語りにもとづいた権利擁護を活動の核とする）、③みせる（活動を通して社会福祉士のアイデンティティの確立をめざす）、④つなぐ（ネットワークに支援ツールやリスクマネジメント、対価獲得など多様な意味を付与し独立型社会福祉士の生命線とする）、⑤つくる（利用者個々の利益を高める活動だけでなく利用者の利益の延長線に地域づくりも視野にいれる）、⑥ゆらぐ（問いの保持を基点に非倫理的実践を発生させないよう反省的实践に努める）が形成されていた。

しかし、既存組織における様々な制限は、専門性の発揮を困難にしていた一方で独善的な活動を制限していたことも考えられる。自律性が高い中で形成される実践観は、個人的価値やパーソナリティが強く反映されていることも伺えた。ソーシャルワークでは、支援者そのものを道具と位置づけるが、ソーシャルワーク実践への個人的価値の過度な反映は利用者の不利益につながるものが危惧される。そのため、今後は非倫理的な実践が発生しないシステムの構築や独立型社会福祉士の実践をサポートするシステムの整備の検討が必要である。

## VI. 今後の課題

今回の調査の限界としては、第一に理論の飽和化に必要とされる調査対象者数を確保したが、独

立型社会福祉士の活動は多様で今回の調査データから独立型社会福祉士のソーシャルワーク実践を捉えるには不十分であること、第二に調査協力者への依頼を紹介によって行ったため紹介者と似た価値観や実践内容の独立型社会福祉士が紹介をうける傾向にあり調査協力者に偏りがみられること、第三に独立時期が異なるため現時点での実践を語った内容と過去の実践を振り返って語った内容が混在しており、特に過去の実践を振り返っての語りには現在の意識が影響を与えていることが予想され実践の解釈が「あとづけ」された可能性が否定できないこと、第四に個人事務所やNPO法人など実践形態によってソーシャルワーク課題や理念の位置づけが異なることが予想されること、などがあげられる。今後は、これらの課題に対して、アンケートなどの量的調査から実態把握を行い、独立型の形態や活動期間などの分類や行うとともに、実践形態ごとの課題の整理や倫理的課題やサポートシステムについても検討していきたい。

付記 本研究は、科学研究費補助金若手研究（B）の助成「中山間地域における『独立型社会福祉士』の（不）可能性に関する研究」（課題番号：20730372）の成果の一部である。

## 謝 辞

インタビューにご協力くださった独立型社会福祉士のみなさまに心から感謝の意を表します。

## 参考文献

- 五百木孝行（2010）「地域社会における独立型社会福祉士の存立基盤の可能性と創造ー地域福祉の新しい担い手・連携・協働を目指して」『龍谷大学大学院法学研究』（12）、龍谷大学大学院法学研究編集委員会、103-133
- 平塚良子（2011）「ソーシャルワーカーの実践観」『ソーシャルワーク研究』36（4）317-323
- 香春知永（1990）『看護基礎教育過程における専門職的自律性に関する研究ー看護学校・短期大学・大学における専門職的自律性の相違ー』『看護研究』23（1）、78-84
- 木下康仁（2007）『ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法ー修正版グラウンデッド・セオリーアプローチのすべて』弘文堂
- 高良麻子（2010a）「独立型社会福祉士の独自性と課題ー独立型および既存組織所属社会福祉士に対する調査結果から」『東京学芸大学紀要人文社会科学系Ⅱ』61、203-213
- 高良麻子（2010b）「福祉政策にもとづく制度から排除された人々への支援ー独立型社会福祉士の実践を通してー」『社会福祉学』51（1）、3-17
- 水嶋正浩（2007）「独立型社会福祉士の活動に関する研究」『日米高齢者保健福祉学会誌』2、211-229
- 日本社会福祉士会・独立型社会福祉士全国ネットワーク委員会・独立型社会福祉士研修委員会（2004）「第二回独立型社会福祉士全国研究集会のプログラムと資料ー独立型社会福祉士の可能性と活動基盤の構築に向けて」
- 日本社会福祉士会独立型社会福祉士研修委員会（2006）『独立型社会福祉士養成研修テキスト』日本社会福祉士会
- 日本社会福祉士会独立型社会福祉士委員会編（2008）『独立型社会福祉士ガイドブック2009年度版』日本社会福祉士会
- 小川幸裕（2007）「独立型社会福祉士の動向に関する一考察」『帯広大谷短期大学』44、33-42
- 小川幸裕（2008a）「独立型社会福祉士に関する研究ー社会福祉士が中山間地域で独立する可能性と限界」『北星学園大学大学院社会福祉学研究科北星学園大学大学院論集』11、47-54
- 小川幸裕（2008b）「独立型社会福祉士に関する仮説的研究ー社会福祉士が独立を選択する過程にみる援助観形成プロセス」『弘前学院大学社会福祉学部研究紀要』8、11-17
- 太田義弘・安井理夫・小榮住まゆ子（2010）「高度専門職としてのソーシャルワーク実践の役割と課題」『関西福祉科学大学紀要』13、1-18
- 辻ちえ・竹田千佐子・伊良部優子（2004）「看護の専門職的自律性に関与する要因」『聖隷クリストファー大学看護学部紀要』12、27-38
- 時井聰（2005）「第1章 専門職概念の検討」『専門職論再考』学文社、15
- 柳田明子（2011）「現場から提起するソーシャルワークの課題 独立型社会福祉士が果たすソーシャルワーク機能ー地域を基盤としたソーシャルワーク実践とその課題」『ソーシャルワーク研究』37（1）、相川書房、63-67